

発達保育実践政策学センター  
公開シンポジウム

**「園調査」の結果から見えてきたもの**  
**- 課題と可能性 -**

遠藤 利彦  
(東京大学)

## <結果> 労働環境が保育者に及ぼす影響

- 「労働環境・待遇にまつわる負担」  
→ 職務満足感の低さ・体調不良
- 「園内の人間関係にまつわる負担」  
(殊に管理職との関係性)  
→ 職務満足感の低さ



● 「身体労働」「心理労働」

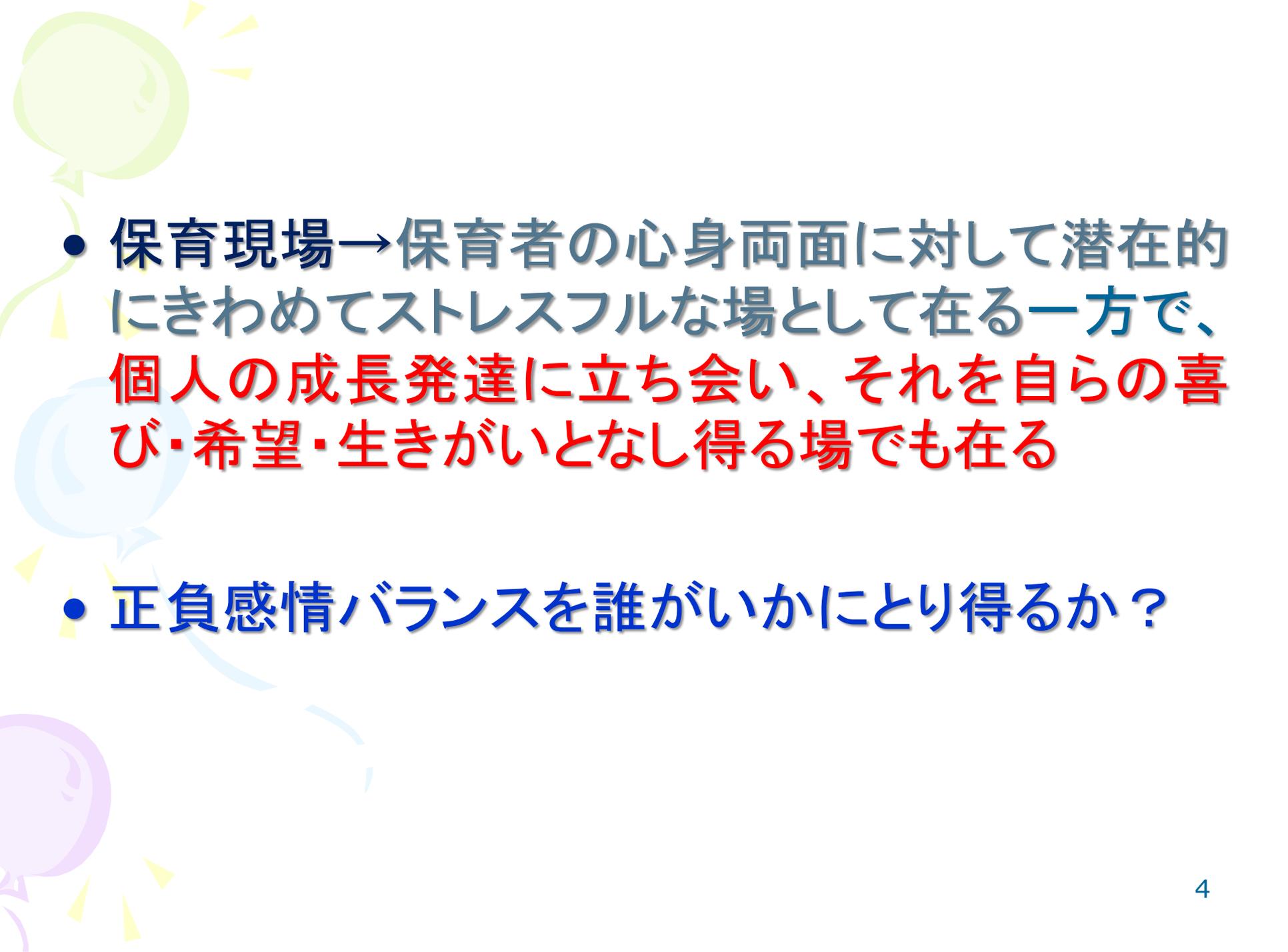
とりわけ「感情労働」としての保育



● 多様な他者との間で種々の感情を経験・表出し、  
またその管理・調整を求められる



● 「表層」のみならず、「深層」レベルにおいても  
「感情演技(?)」あるいは「真正感情」で応じる

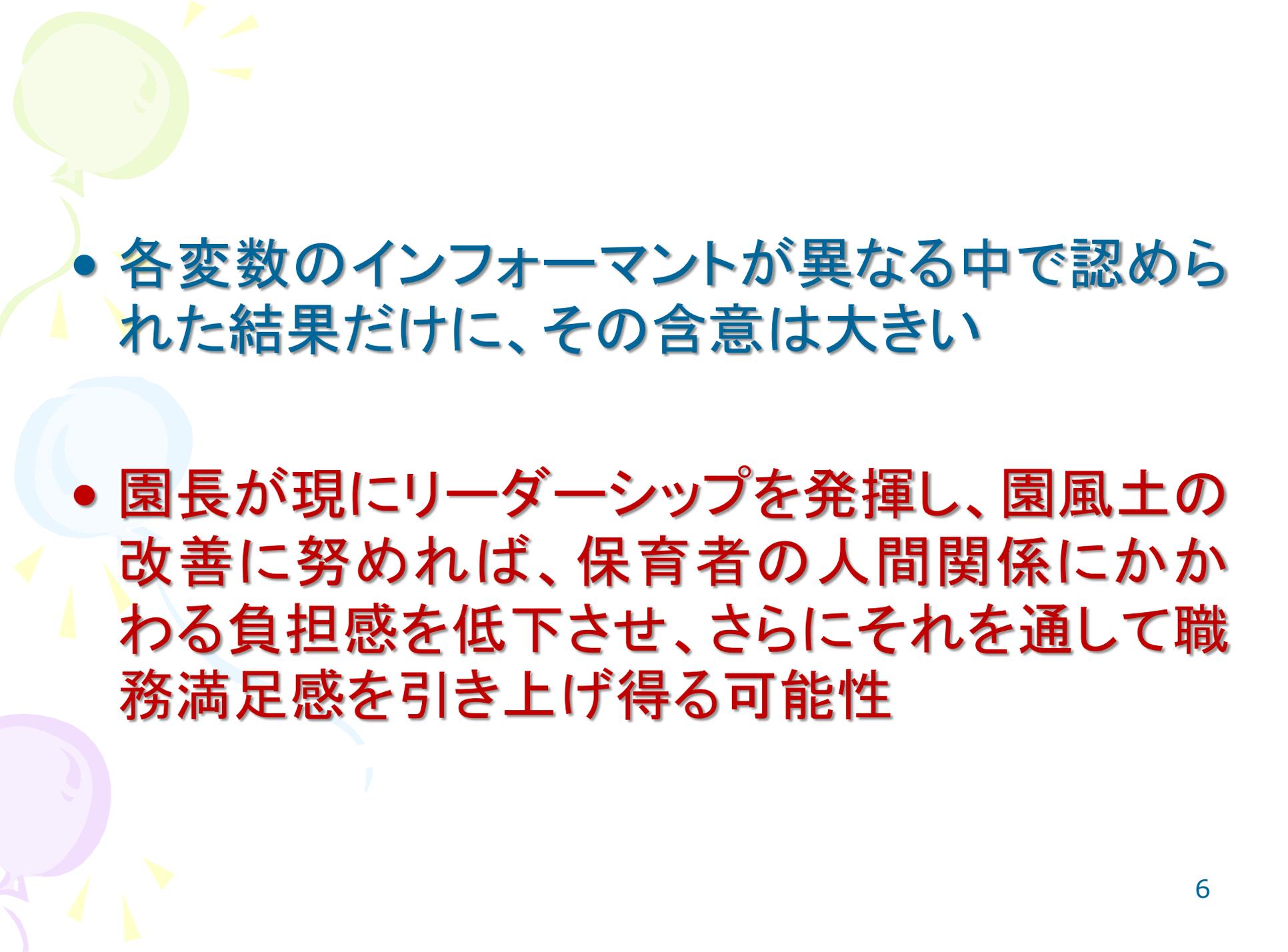
- 
- 保育現場→保育者の心身両面に対して潜在的にきわめてストレスフルな場として在る一方で、**個人の成長発達に立ち会い、それを自らの喜び・希望・生きがいとなし得る場でも在る**
  - 正負感情バランスを誰がいかにとり得るか？

## ＜結果＞リーダーシップが及ぼす影響

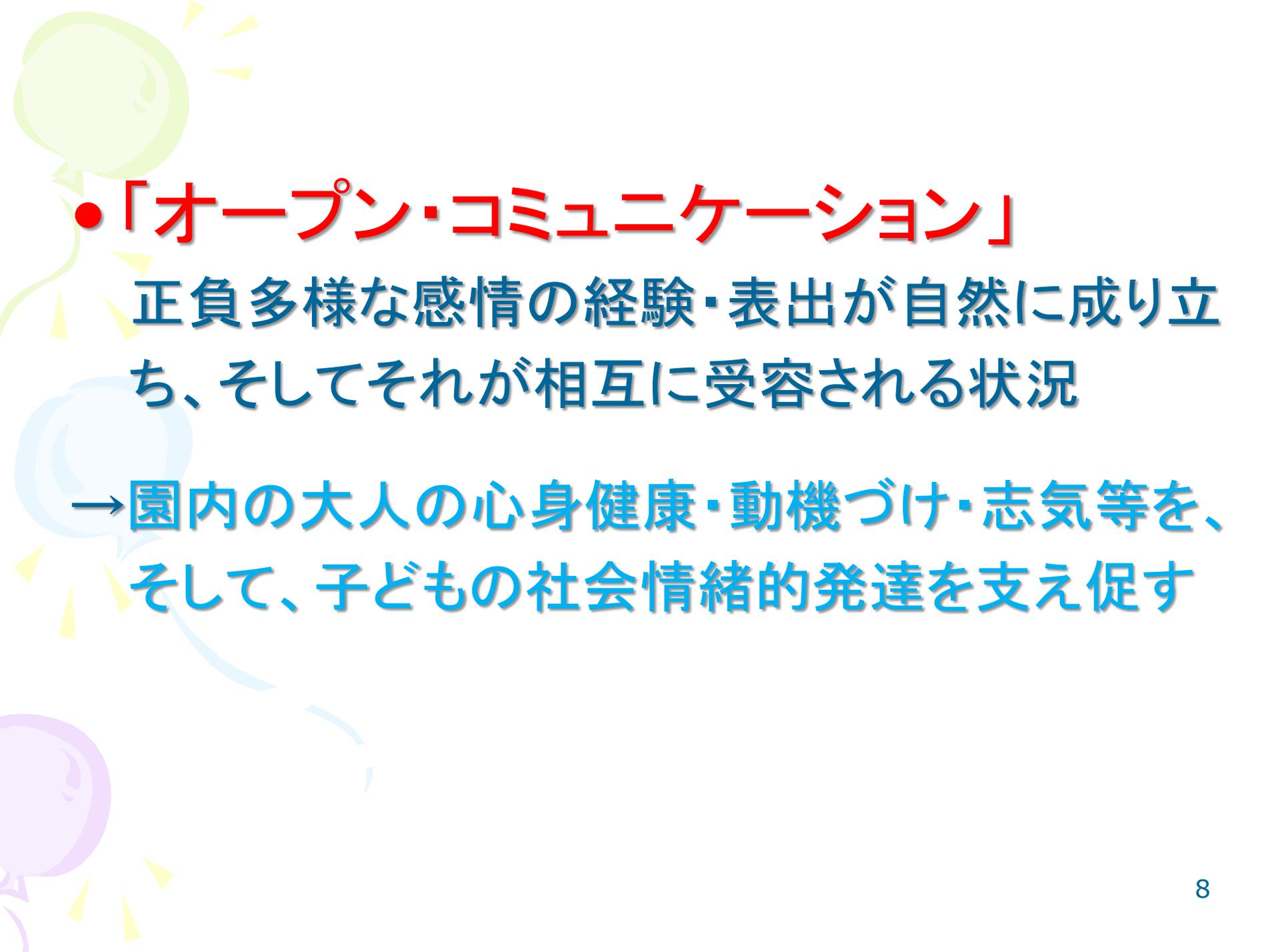
- 園長のリーダーシップ

殊に「組織の運営・園の風土」向上の取り組み

→ 担任保育者の「人間関係にかかわる負担」  
「労働環境・待遇に関わる負担」の低さ

- 
- 各変数のインフォーマントが異なる中で認められた結果だけに、その含意は大きい
  - 園長が現にリーダーシップを発揮し、園風土の改善に努めれば、保育者の人間関係にかかわる負担感を低下させ、さらにそれを通して職務満足感を引き上げ得る可能性

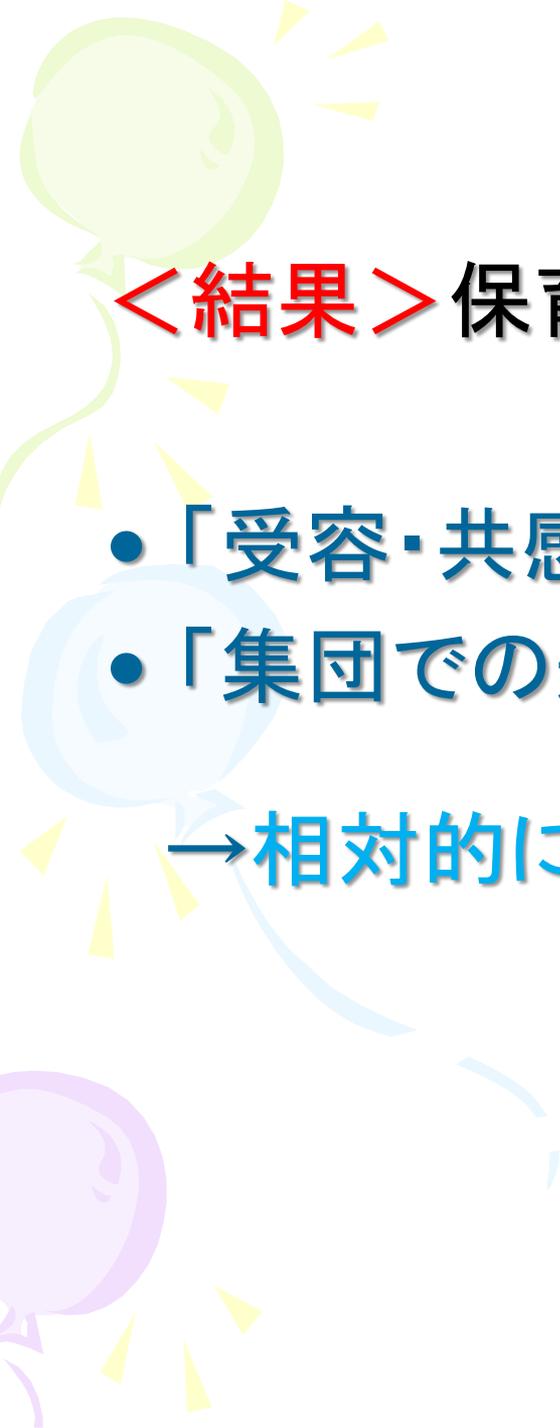
- 園の「感情風土」→子どもの発達にも深く関与
- 保育者個々の感情状態と園の「感情風土」は相互に影響し合う、そして子どもも園特有の「感情風土」の下で成育する
- 子どもを包み込む「感情風土」は子どもの心的状態の安定性を大きく左右し得る→子どもは自身が当事者として参加する関係性のみならず、その背景に在る第三者間の関係性にも敏感に反応し、その影響を時に強く受ける可能性あり



## ●「オープン・コミュニケーション」

正負多様な感情の経験・表出が自然に成り立ち、そしてそれが相互に受容される状況

→園内の大人の心身健康・動機づけ・志気等を、  
そして、子どもの社会情緒的発達を支え促す



## <結果> 保育におけるかかわりの質

- 「受容・共感・傾聴」(全年齢)
- 「集団での遊び・活動の支援」(3・5歳児)

→ 相対的に高い自己評価

- 「受容・共感・傾聴」

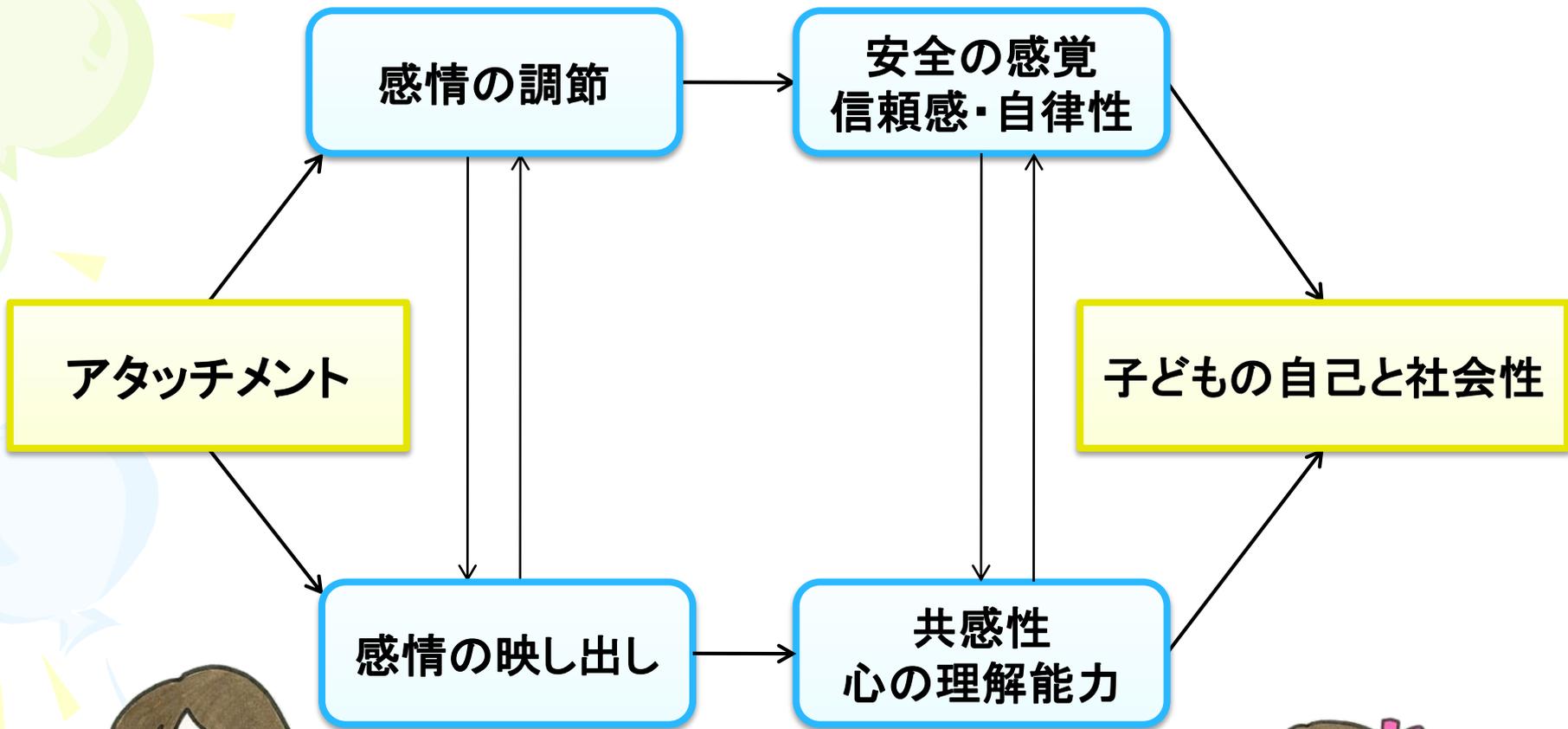
→感情の「制御・調整」と「調律・映し出し」の効果

- その両側面が伴った関わりは子どもの種々の社会情緒的発達を最も効果的に支え・促す

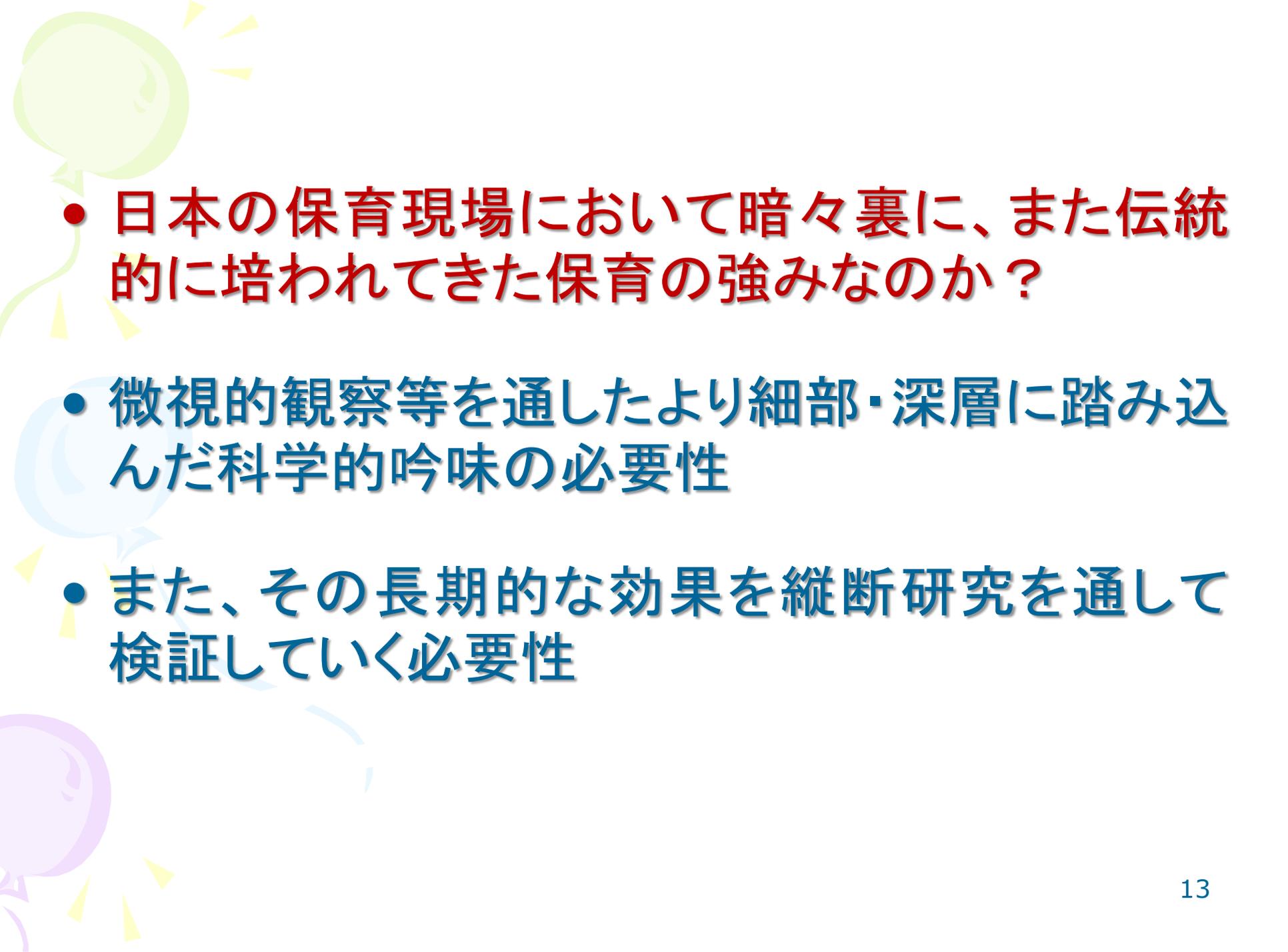
- 「集団での遊び・活動の支援」

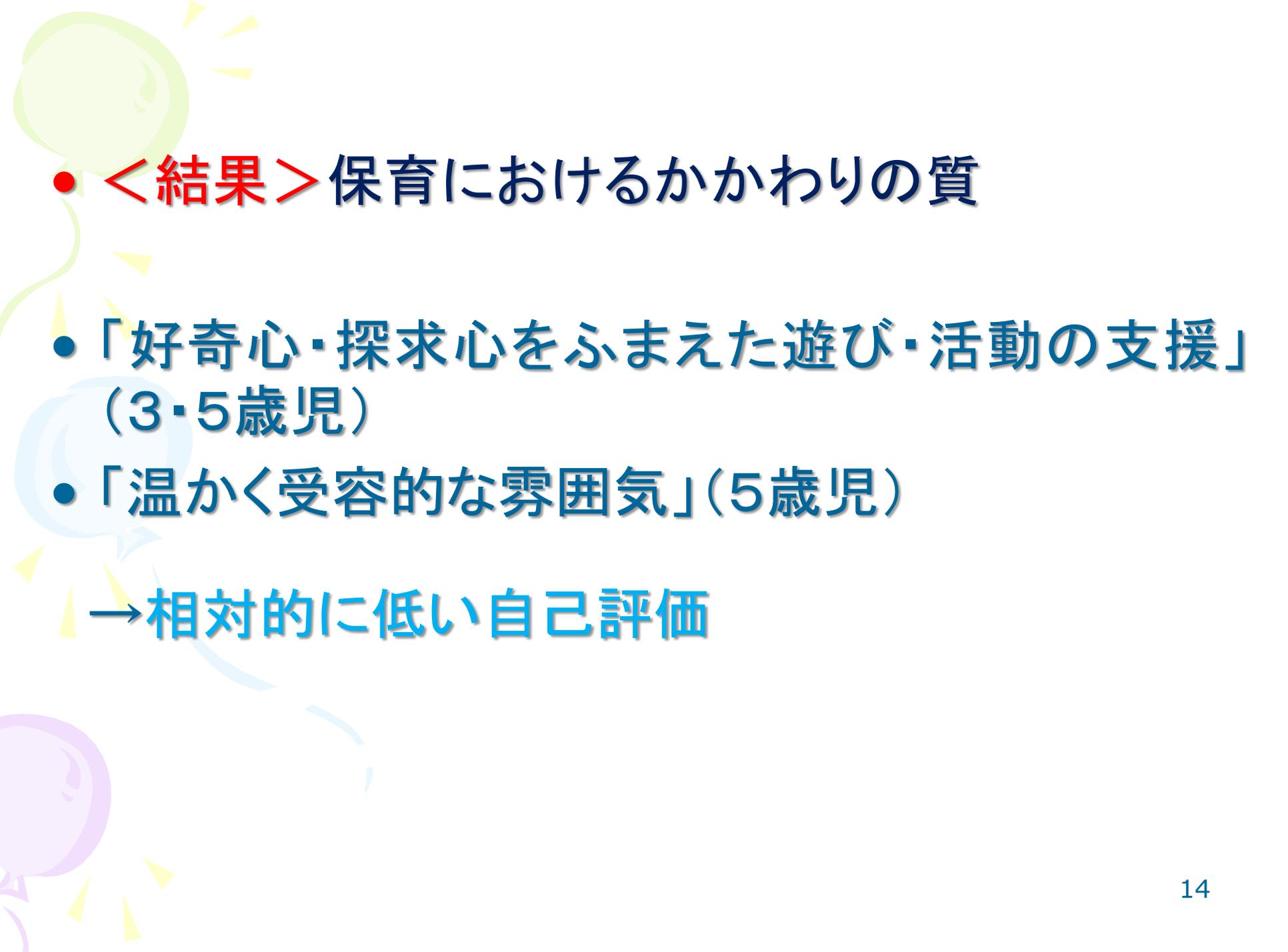
→集団規模や「子ども・大人」比にあまり左右されない「集団的敏感性」の有効性

- 「二者関係的敏感性」が集団サイズの増大とともに相対的に効果を低下させるのに対して、「集団的敏感性」を豊かに備えた保育者においては、子ども同士の協調的・親和的關係性や学び合いなどが促され、結果的に保育者と個々の子どもとの個別の關係性も総じて安定・良好なものになる傾向がある



- 集団状況に適した“sensitivity” のあり方
- 「養護環境に家庭的雰囲気」→確かに一つの課題ではあるが、集団状況で機能する子どもに対するケアは親子二者間で機能するケアとは元来、異質なものである可能性(e.g. Ahnert et al., 2006)
- ***Dyad-related sensitivity (DS)***  
個の欲求に対する反応の素早さとの確さ
- ***Group-related sensitivity (GS)***  
集団全体に対する共感性・許容性・構造化 etc.

- 
- 日本の保育現場において暗々裏に、また伝統的に培われてきた保育の強みなのか？
  - 微視的観察等を通したより細部・深層に踏み込んだ科学的吟味の必要性
  - また、その長期的な効果を縦断研究を通して検証していく必要性



- **<結果>** 保育におけるかかわりの質

- 「好奇心・探求心をふまえた遊び・活動の支援」  
(3・5歳児)

- 「温かく受容的な雰囲気」(5歳児)

→ 相対的に低い自己評価

●「好奇心・探求心をふまえた遊び・活動の支援」  
「温かく受容的な雰囲気」

→安全基地として温かい情緒雰囲気を背後から  
（「応援団」として）醸しながら、子どもの積極的  
な探索を支援することの有効性

→侵害せずに見護り、時に黒子として環境の構造  
化を図りながら、子ども個々の自発的遊び/学  
びを支え、自律性の発達を促す

- この自己評価の低さは、いかに保育の実態を反映しているのか、あるいはそれがあある程度、現実のものだとすれば、何故に生じているのかについての科学的吟味の必要性
- (殊に年長児になるほど) 物理的環境の制約が結果に関与している可能性!?
- 「制約された」物理的環境の中で、それをどう高め得るのかの実践的解明の必要性